様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２４８４

研究課題名（和文）就学前教育と初等教育の接続を促すリテラシー評価スケールの開発

研究課題名（英文）Development of a Literacy Scale for Successful Transitions from Early Childhood Education and Care Settings to Primary School.

研究代表者
松本　博雄（Matsumoto, Hiroo）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：２０３５２８８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児期から学童期のリテラシー発達に対する就学前教育実践の影響を明らかにすることをねらいに、初期リテラシーの評価スケールの開発と、それを支える保育実践の質の検討を目的とした。そのため、初期リテラシー評価指標の要件を探求する国際比較調査と、探求された評価指標の保育実践への適用可能性の検討に取り組んだ。その結果、社会的側面に着目した評価指標を具体化する手法として、伝えたくなる相手との日々の生活経験と、それを言語表現とする適切な環境構成を保障する必要性が示唆された

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究で焦点をあてている初期リテラシー発達の問題は、就学前教育の質に関わる国際的な議論において、幅広く実証研究が重ねられている代表的な課題の一つであるものの、国内においては十分に注目されていない。本研究の成果によって、現在「架け橋期」として注目されている幼小移行期の教育実践を考えるうえで、遊びを主とする就学前の側からも、教科教育を主とする小学校教育の側からも共有可能な指標を提供することができる。

研究成果の概要（英文）：Interactions throughout early childhood education and care (ECEC) practices would facilitate young children's literacy development at the transition stage from ECEC provision to primary school. This research aimed to explore how to assess early literacy development and enhance the process quality of ECEC practices. A longitudinal ethnographic study of literacy lessons in England compared with Japanese ECEC practices and an action research project in two kindergartens in Japan were conducted. The findings suggest that experiences shared with somebody hearing children's voices about their play and lives in the ECEC settings and appropriate settings for their writing could enhance children's repertoire of communication and expression through their writing. It has implications for the early literacy assessment indicators focusing on social aspects.

研究分野：教育心理学・発達心理学

キーワード：文字習得　幼児　保育　初期リテラシー　書き　保育の質　保幼小接続　アクションリサーチ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

就学前教育から小学校教育への移行期において、子どもの初期リテラシー（Early literacy）習得をどのように理解し、いかなる実践を通じて支えるかという問題は、日本の就学前教育においてはそれほど注意が払われていないものの、国際的には幅広く実証研究が重ねられている課題の一つである。公共政策の中で就学前教育への投資効果に注目が集まっている近年の現状は、就学前教育の成果と、それを支える実践の質を説明する必要性をより高めているといえよう。

これまでのリテラシー習得に関する研究は、individualistic orientations すなわち個人単位の認知プロセスとしてリテラシーを仮定する方向性と、social orientations すなわちそれが活用される場を含んだ社会的側面を単位とする方向性に整理できる。このことに関し Cummins（2016）は、両者はともに一定の妥当性をもつアプローチであるものの、英国や米国における過去 15 年間の教育政策は主に前者に依存してきたと指摘する。それは結果的に、標準化テストに基づく文字知識や語彙量など、数値化しやすい観点からリテラシー獲得を位置づけ、評価する傾向をもたらしたという。いっぽうで、文字等の言葉を用いて子どもが多様に表現したくなる活動をいかに構成するか、そのような活動を引き出す保育者・教師の信念（belief）や役割をいかに支えるかという、初期リテラシー習得を支える保育・教育実践へと実際に結びつく、より広義の観点にはそれほど注意が払われない傾向が導かれたと考えられる。

これに対し、日本の就学前教育実践における計画と実践のガイドラインである幼稚園教育要領や保育所保育指針、認定こども園保育・教育要領は、子どもの心情・意欲・態度の総合的な形成を主とした記述で構成されている。リテラシーに関わる内容はその一部を占めるにすぎず、十分な注目されているとは言いがたい。実際に多くの就学前教育施設においては、子どもの社会性や運動・食育等を総合した体づくり、造形・音楽等の表現活動に教育的価値が置かれている。いっぽうでそれと対照的に、ワークブックなどを積極的に活用しながら、小学校の教科内容の先取り的にリテラシーを扱う就学前教育実践もまた存在する。いずれにせよ、幼児期に固有の初期リテラシー習得のありようと、それを支える実践内容とその質として何が適切かについては、いまだ十分な議論が深められていない。

## ２．研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究では、幼児期から学童期のリテラシー発達に対し、就学前教育実践が与える影響を明らかにすることを目指し、初期リテラシー発達の評価スケールの開発と、それを支える保育実践の質の検討を目的とした。そのために本研究では、保育実践を通じての幼児期の文字習得に関わる諸課題を、初期リテラシー発達をキーワードに、上述の社会的側面に着目した観点に基づき具体的に探求することから着手した。

## ３．研究の方法

上記の目的に基づき、以下２点から研究を進めた。

### (1) 初期リテラシー評価指標を探求するための国際比較調査

保育・教育実践におけるリテラシー習得の位置づけと内容、また就学前から小学校教育への移行環境に関し、日本とは対照的な背景をもつ、英国・イングランドの保育・教育実践に着目し、リテラシー指導の実態把握のための観察調査（エスノグラフィック・フィールドワーク）、ならびに保育者・教師計 8 名への半構造化インタビュー調査を行った。調査は現地の 2 つの公立学校（Primary school）にて、2018 年 10 月-2019 年 3 月の間、のべ 57 日間にわたって実施し、初期リテラシー発達への取り組みの実態と、その背景にある理念、およびそれを可能にする条件や制度についての資料を収集した。その結果に基づき、これまでに調査してきた、日本における就学前・小学校教育実践での初期リテラシーに関する指導傾向との比較を試みた。

### (2) 探求された評価指標の保育実践への適用可能性の検討

(1)の研究から示唆されたのは、日本・イングランド双方の就学前教育実践ではともに、自分の思いや考えを言葉で表現することが大切にされるいっぽうで、日本の就学前教育実践の中では、それを初期リテラシーの基盤としてみなし、評価しようとする取り組みが少ないという事実である。このことをふまえ、初期リテラシーに関わる幼児期の言語表現の新たな評価方法の試行、保育実践においてそれを引き出し支える条件の検討をねらいとして、国公立幼稚園 2 園に研究協力を依頼し、2019 年から 2022 年にかけて調査を実施した。具体的に取り組んだのは、4-5 歳児のべ 237 名と調査補助者である大学生（のべ 93 名）との間で、自由遊びを通じて一定の人間関係を作った後に手紙のやりとりを試みる、保育者と共同してのアクションリサーチである。

## ４．研究成果

### (1) 初期リテラシー評価指標を探求するための国際比較調査

イングランドでは、就学前教育カリキュラムが適用されるのはレセプション（Reception）と呼ばれる 5 歳までの子どもが属するクラスであり、それ以降は初等教育カリキュラムが適用さ

れる。いっぽう、今回の観察対象校を含めた多くの Primary School には、Reception クラスと Year1 以降のクラスが含まれており、初期リテラシーへの指導法をはじめとして、幼-小移行期の内容差は日本に比べ少ない。観察クラスでの実践では、個々の語や文字を正確に書くこと以上に、それを用いて何を表現するかという内容、その前提となる、子ども自身が表現しようとする意欲・態度の重視という点で、クラスや学年を超えた共通性が見いだされた。いっぽう、それをどのように記録・評価し、次の実践に実質的に結びつくものにするかという点は、保育・教育実践記録（Pedagogical Documentation）をはじめ、各クラスの特徴が色濃く反映されていた。

以上の結果を、本研究期間内に学術論文として出版した研究成果である、日本の既存の保育実践におけるリテラシーに関する保育者の指導観と比較検討した際に見えてきたのは、対話の枠組みを土台として、それぞれの子どもに合わせてアレンジした課題をもとに、コミュニケーションを保障する多様な機会を設けることのもつ可能性である。そのような実践に伴う経験は、実際の文字を使ってのやりとりと、表現のレパートリーの広がりを介して、自分の思いや考えを表現する手段である文字の使い手としての自覚を子どもに育むことへと結びつきうる。このことは、社会的側面に着目して初期リテラシー発達を促す試みによって、子どもの多様な表現を引き出しうる可能性、またその姿を認めることを介して、自立した学び手としての自己表現の獲得の延長線上に文字習得を位置づける、新たなリテラシー評価指標の必要性を示唆している。

(2) 探求された評価指標の保育実践への適用可能性の検討

初期リテラシーを把握し、評価する新たな方法として試行されたアクションリサーチによって、一定数以上の参加児に自ら手紙を書こうとする様子が観察された。自ら手紙を書いた子どもの数は、2019 年度は 118 名中 81 名（68.6%）、2020 年度は 117 名中 85 名（72.6%）、2021 年度は 119 名中 64 名（53.8%）であった。子どもたちの手紙に記載された内容とその種類、内容がある手紙の絶対数等について、横山（2004）に代表される、保育実践における手紙をやりとりする活動を体系的に分析した先行研究と比較し分析した。その結果「宛先を明確にした手紙のやりとり」という本研究における設定によって、子どもたちは先行研究と比べ、年齢を問わず、幅広い内容を記載した手紙を数多く交わしたことが示された。

合わせてそれらが、対面での情報共有を前提としない、文面上でのコミュニケーションとして成り立っていたかを分析した。4 歳児から 5 歳児にかけて、年度をまたいで研究に参加したのべ 117 名の変化をマクニマー検定により分析したところ、$p<.001$ の水準で 4-5 歳児の間に有意差が確認された。これらの結果は、具体的な相手との、伝え合いたい内容につながる遊び等の「共有体験」を土台として、4 歳児から 5 歳児にかけて、習得された文字を介してのコミュニケーションが徐々に発達することを示唆するものである。

以上の分析と、個々のケースの詳細を検討した結果から明らかになったのは、伝えたくなる相手との日々の生活に基づく経験、そのための道具立てが適切に設定されることで、幼児の「声」が表現として引き出され、把握・評価されうることである。特に本研究のアクションリサーチを通じ、ふだんは手紙や文字に関心が薄かった対象児に「書こうとする」姿勢が引き出されたこと、書き表現の土台の多くが友だちや保育者との日常の遊びにあったこと、「おてがみありがとう」等の定型表現が書き始めの段階において多く観察されたことの３点は、就学前教育における初期リテラシーを支える保育実践のあり方の検討と、それを通じて現れる子どもの姿を捉える指標の作成にあたって新たな手がかりとなると考えられる。

(3) 研究成果のもつ意味と今後の展望

本研究では当初、上述の２つの研究に加え、見いだされた初期リテラシー評価指標の幼-小移行期への適用可能性を検討するために、小学生および小学校教諭を対象とした調査を計画していた。しかしながら、2020 年度以降の新型コロナウィルス感染症の蔓延の影響で小学校調査は断念せざるを得なかった。よって本研究では、予定通り実施できた幼児を対象とする調査の結果をもとに、初期リテラシーを把握・評価する指標の手がかりについて詳細に検討した。その結果、①子ども自身が言葉を介して伝えたくなる場の設定、②そこでの表現を受けとめ、楽しんでくれる相手の存在、③その相手とともに過ごし、互いの関係性を育む機会、④それらを意識しアレンジされた道具立てを含む環境構成、の 4 つの条件が、子どもの書き表現のレパートリーを拡大させ、幼児期の初期リテラシーを発達させる鍵となることが示唆された。今後は見いだされた指標を用いて、幼児期から学童期にかけての縦断的な資料収集を計画し、学童期におけるリテラシー習得の基盤として、どのような幼児期の経験が考えられるか、それはいかなる質の就学前教育実践によって支えられる必要があるかを引き続き検討していく予定である。

＜引用文献＞

Cummins, J. (2016) Individualistic and Social Orientations to Literacy Research: Bringing Voices Together? Keynote 3 of United Kingdom Literacy Association 52nd International Conference.

横山真貴子 (2004) 絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の研究―保育における幼児の文字を媒介とした活動― 風間書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Hiroo Matsumoto, Hiromi Nishiu, Mina Taniguchi, Motoko Kataoka & Gota Matsui | ４．巻<br>－ |
| ２．論文標題<br>Pedagogical photo documentation for play in early childhood education and care | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Early Years | ６．最初と最後の頁<br>－ |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1080/09575146.2021.2017407 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本 博雄 | ４．巻<br>166 |
| ２．論文標題<br>０歳児の“声”を聴きとる：「発達」の視点を手がかりに | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>発達（ミネルヴァ書房） | ６．最初と最後の頁<br>21-26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Hiroo Matsumoto, & Miho M Tsuneda | ４．巻<br>21 |
| ２．論文標題<br>Judith T Lysaker, Before words: wordless picture books and the development of reading in young children | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>Journal of Early Childhood Literacy | ６．最初と最後の頁<br>171-174 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1177/1468798420981757 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本 博雄 | ４．巻<br>698 |
| ２．論文標題<br>子どもの「声を聴きとられる」権利を支えるために | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>ちいさいなかま（全国保育団体連絡会） | ６．最初と最後の頁<br>88-95 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Hiroo Matsumoto, & Miho M Tsuneda | 4．巻<br>27 |
| 2．論文標題<br>Teachers' beliefs about literacy practices for young children in early childhood education and care settings | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>International Journal of Early Years Education | 6．最初と最後の頁<br>441-456 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1080/09669760.2018.1547630 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>松本 博雄、西宇 宏美、谷口 美奈、片岡 元子、松井 剛太 | 4．巻<br>56 |
| 2．論文標題<br>遊びの質を高める保育アセスメントモデルの検討 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>保育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>91-102 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.20617/reccej.56.1_91 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Matsumoto, H. & Tsuneda, M. |
| 2．発表標題<br>Encouraging Young Children's Writing Development through Playful Activities in Early Childhood Education and Care Practices |
| 3．学会等名<br>United Kingdom Literacy Association International Conference 2022（国際学会） |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>松本博雄・片岡元子・吉川暢子・藤元恭子 |
| 2．発表標題<br>幼児の声を聴きとるII：手紙の内容とやりとりの発展から |
| 3．学会等名<br>日本保育学会第75回大会 |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松本博雄 |
| ２．発表標題<br>リテラシーから幼小移行期の保育・教育実践を考える |
| ３．学会等名<br>心理科学研究会2022春の全国集会 乳幼児分科会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松本博雄・谷口美奈・片岡元子・吉川暢子・藤元恭子・松井剛太 |
| ２．発表標題<br>幼児の声を聴きとる―「書きたくなる」を支えるために― |
| ３．学会等名<br>日本保育学会第74回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Matsumoto, H. & Tsuneda, M. |
| ２．発表標題<br>Being willing to engage in writing activities: empowering young children through early literacy practices. |
| ３．学会等名<br>United Kingdom Literacy Association 56th International Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松本博雄 |
| ２．発表標題<br>「書きたくなる」は何によって支えられるか |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会第62回総会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Matsumoto Hiroo. |
| ２．発表標題<br>Play as learning tools or play as play?: Supporting young children’s learning dispositions through ECEC practices. |
| ３．学会等名<br>TACTYC (Association for Professional Development in Early Years) One Day Conference and AGM 2019.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Matsumoto Hiroo, Tsuneda Miho M. |
| ２．発表標題<br>What is the structure of ‘play-based’ pedagogies in the literacy practices for four-to-six-year-old children? |
| ３．学会等名<br>United Kingdom Literacy Association 55th International Conference.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Matsumoto, H. |
| ２．発表標題<br>Pedagogical Photo Documentation Addressed to Young Children in Early Childhood Education and Care Practices. |
| ３．学会等名<br>Teachers' College of National Chiayi University 2019 International Conference on Artificial Intelligence Development and Its Impact on Educational Leadership and Innovation.（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Matsumoto Hiroo |
| ２．発表標題<br>Pedagogical Photo Documentation Addressed to Children: For Listening to the Voices of Children, Parents and Guardians, and Practitioners through ECEC Practices. |
| ３．学会等名<br>South East England Early Childhood Research and Practice Association.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Matsumoto, H., Nishiu, H., Taniguchi, M., Kataoka, M. & Matsui, G. |
| ２．発表標題<br>Capturing and Improving the Quality of Play in Early Childhood Education and Care Settings through Photo Documentation via Wall Displays for Children. |
| ３．学会等名<br>TACTYC (Association for Professional Development in Early Years) 40th Year Anniversary Conference 2018.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本博雄 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>中央大学大学院文学研究科博士論文 | ５．総ページ数<br>170 |
| ３．書名<br>保育実践を介した幼児期の文字習得の検討：社会的側面に着目した初期リテラシー発達の視点から | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>心理科学研究会 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>有斐閣 | ５．総ページ数<br>316 |
| ３．書名<br>新・育ちあう乳幼児心理学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| Kagawa Child Research Websites<br>https://sites.google.com/site/kagawachild/home |

## ６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 松井　剛太<br>(Matsui Gota)<br>(50432703) | 香川大学・教育学部・准教授<br>(16201) | |

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 常田　美穂<br>(Tsuneda Miho) | 特定非営利活動法人わははネット・子育て支援コーディネーター | |

## ７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

## ８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 英国 | Canterbury Christ Church University | | | |